

# 朱基徹牧師の抵抗権思想

野 寺 博 文

はじめに

朱基徹牧師の殉教は韓国の教会史にとって重要な意味を持つ。しかし、同時に、それと同じぐらい日本の教会史を総括する上で重要な意味を持つと思う。朱基徹牧師は一体なぜ神社参拝の強制に抵抗したのか。この小論文では、朱基徹牧師の闘いの意味を評価した上で、今日の日本の教会にとっての意味を考える。そして、これが日本の教会のあり方を根底から問い直す大きな光となると信じる。

## I 神社参拝の強制

まずは日本が神社参拝を強制するに至った経過を簡単に見てみよう。日清日露戦争の勝利により朝鮮半島での中国ロシアの影響を排除した日本は、一九一〇年韓国を併合。言論を統制し、土地や漁場、地下資源等々を奪い、軍隊を解散させ、立法、司法、行政の全権を掌握する。陸海軍大将が総督を務め、武官の憲兵が文官の警察官を兼務するという恐るべき「憲兵警察制度」のもと、被疑者の陳述と警察署長の認証のみで処刑できる「犯罪即決法」を施行し、総督府は教会と民族運動指導者を弾圧する。武力弾圧は一九一九年の

三・一独立運動の際にピークに達し、七、五〇九人が殺され、四六、九四八人が逮捕された。水原にある堤岩里教会はこの時日本軍によって全村民ごと焼き討ちされた。一九一一年「私立学校規則」で日本語の使用を強制し、ミッションスクールでの宗教教育を禁止する。そして、日本の朝鮮侵略を正当化するため植民史観に立脚した「朝鮮半島史」を捏造する。

朝鮮半島に対する植民地支配が強まるのは、日本が本格的に中国を侵略する満州事変（一九三二）以降の十五年間である。日本は朝鮮半島を中国侵略のための「兵站基地」（前線への補給基地）とし、物的人的に戦争に動員するため朝鮮の人たちを日本人に「同化」させ、「皇国臣民化」、「内鮮融和」（一九三二）、そして「内鮮一体」（一九三六）政策で戦争に動員する。「内鮮一体」とは「韓国民族は日本民族と運命を共にする日本民族の一部であり、いわゆる興亜的民族解放の対象ではなく、日本民族と共にアジア諸民族を西欧の帝国主義の圧政から解放せねばならない主体」だというもの。それで、「一、私共は大日本帝国の臣民であります。二、私共は心を合わせて天皇陛下に忠義を尽くします。三、私共は忍苦鍛錬して立派な強い国民となります。」という「皇国臣民の誓詞」を一九三七年から学校、教会、あらゆる集会で唱えさせ、一九三八年には韓国語の使用を禁止し、国民精神総動員朝鮮連盟を結成し、十戸単位で「愛国班」を組織して、毎朝の宮城遙拜、神社参拜、「皇国臣民の誓詞」、日の丸の掲揚、日の丸への敬礼、君が代奉唱等を強制する。こうして、日本は「兵站基地」の朝鮮「臣民」たちを無理やり神社に参拝させ、「日の丸」に敬礼させ、「君が代」を歌わせ、天皇と大日本帝国に忠誠を誓わせて、天皇の栄光をあらわす「八紘一宇」の「聖戦」へと片っ端から動員していった。当時「君が代」の歌詞は「天皇の世が永続するように」という天皇への頌栄だと教えられ、同時に「天皇の時代が永続するために私の人生といのちを捧げます。」という告白だと教育された。それはキリスト者が「父、御子、御霊の大御神にとこしえ変わらぬ御栄えあれ。」（そのために私の人生といの

ちを捧げます」という告白として頌栄を歌うのと同様である。こうして無理やり天皇の「臣民」とされた朝鮮の人々は、天皇と天照大神に絶対忠誠を誓わされて、侵略戦争へと動員されていった。

中でも教会は特に弾圧された。教会は①天皇制や国家神道を軸とする國体の教義とは真つ向から対立する教義を持ち、②内外の民族運動、独立運動と深い関係を持ち、③宣教師たちを通して英米の世論とつながり、④神社参拝を拒否するなど最大の抗日勢力であり、総督府にとつて最も恐るべき敵であった。「朝鮮に於いてキリスト教と日本が共存することはできない。どちらか一方が無くならねばならない。」との初代統監伊藤博文の言葉通りである。その伊藤もカトリック教徒の安重根に射殺された。一九三八年総督府は宣教師たちを国外追放し、日の丸への敬礼、君が代の斉唱、東方遥拝、神社参拝を強制し、賛美歌、説教を嚴重に取締り、出版物を検閲する。また、神社参拝を拒否する教会にはわざわざ国旗掲揚塔を建設させる。そして「当局の指導に従わぬ信徒には法的措置をとる」と脅迫し、警察を動員して神社参拝を決議するよう老会（中会のこと）に圧力を加えた。これに屈したカトリックと監理教は「神社参拝は政治的行動」としてこれを受諾。長老教会は一九三八年九月までに全国に二十三ある老会中十九の老会が神社参拝を決議。総督府は「神社参拝拒否教徒断固検束」の強硬策を打ち出すと同時に、牧師たちを日本に送り、既に神社参拝していた日本の教会を見て回らせる。六月には日本基督教大会議長富田満が来韓し、神社参拝するよう説得して回った。こうして一九三八年九月第二七回長老教総会で神社参拝を可決させ、最後の砦であった長老教会を崩すことで神社参拝の強制はクライマックスを迎える。警察は神社参拝に反対する牧師たちを総会直前に検挙し、老会代表（一九三名）全員を呼び出して、①総会に出席すれば神社参拝が罪でないことを動議する、②神社参拝問題が上程されれば沈黙を守る、③この二点を実行する意志がなければ欠席するよう強要し、従わぬなら拘束すると脅迫。親日的な総代を立て、提案者まで決めておいてから、宣教師たちにはこれに関与しないよう

要求した。こうして総会当日は九七名の制服、私服の警官らが総代の合間合間に席をとって脅迫するという異常な雰囲気の中で、遂に神社参拝決議案が可決し、次のような声明文を出した。「我らは神社は宗教ではなく、基督教の教理に反しないという本意を理解し、神社参拝が愛国的国家儀式であることを自覚し、よって神社参拝を率先励行して国民精神総動員に参加することにより非常時局下での銃後の皇国民として赤子たるの忠誠を尽くすことを期する。昭和十三年九月十日 朝鮮耶穌教長老会総会長 洪澤麒」これ以降、総督府はこの決議文と宗教団体法を利用して本格的に各教会に神社参拝を強要するようになり、礼拝堂にも神棚を設置させ、礼拝の順序に「愛国的儀式」を入れるよう強要。一九四〇年には抵抗するキリスト者の一斉検挙が行われ、二〇〇の教会が閉鎖、二、〇〇〇名が検挙され、五十名が殉教した。日本降伏の二日後となる一九四五年八月十七日には、全国の教会指導者をひとり残らず虐殺する計画まで立てていたのである。<sup>①</sup>

## Ⅱ 朱基徹牧師の抵抗

朱基徹チュキセツ牧師は一九九七年慶南昌原郡熊川ウツソクで生まれる。金益斗キムイクド牧師のリバイバル集会で献身を決意。二十五歳で平壤神学校に入学し、卒業後は釜山草梁教会チヨウライ、馬山文昌教会マンチヤン、平壤山亭峴教会サンシヨクヒョクを牧会。日本による神社参拝の強制に抵抗したため約五年間にわたり四度投獄され、一九四四年四月二十一日平壤刑務所で殉教する。朱基徹牧師の神社参拝に対する闘争は一九二九年慶南老会に神社参拝拒絶案を提出することから始まる。朱牧師は老会の席上、神社参拝が明らかにキリスト教の真理に反逆する罪だと力説して神社参拝反対案を提出。慶南老会は韓国教会史上初めて神社参拝反対案を決議する。<sup>②</sup>当時日本人が発行していた「釜山日報」は、「頑迷なる洋鬼（宣教師が背後にいるという意味で）遂に神社参拝拒否」と事件を大々的に批判した。この時から朱牧師は要注意人物として警察に監視され始める。

一九三五年五月金剛山で五日間行われた牧師修養会で、朱基徹牧師は約二百名の牧師たちに「預言者の權威」と題する説教をする。「『平安だ、〴〵国は無事に発展している』と権力者と時代に迎合する多くの者は言うが、正しいことを語る者は多くない。エレミヤはただひとり神のことは通りに叫んだ。ここに預言者の權威が立ったのである。∴私たちも大衆と時代にへつらうか、神のことは通りに叫ぶか? ∴殺傷与奪の大権を持つ王の面前でその罪を叱責するバプテスマのヨハネも一死覚悟だったし、ナタンやノックスも、ルターも一死覚悟をしていた。一死覚悟をした者が預言をするのであり、一死覚悟をして初めて預言者の權威が世に立つ。みなさん、あなたは何も知らないから何も言えないのか。今日の牧師も一死覚悟をした上で言うべきことを言うならば、牧師の權威、預言者の權威を立派に証しできるのだ。なのに一介の巡査の前でおどおどして∴」ここまで説教した時「中止、解散!」と日本の警察に中断され、解散させられた<sup>③</sup>。

一九三六年平壤山亭峴教会に赴任した朱牧師は最初の役員会で「危機に直面した朝鮮の教会を救えとの神の召命を受けてここに来ました。」と証しして、こう宣言した。「①神社参拝は第一戒と二戒を犯す罪である故これを徹底的に排撃せねばならない。②神社参拝に応じる信徒は地位や身分を問わず公開除名処分にし、教会から追放する。③神社参拝拒否による一切の責任は堂会長の私が負う。」<sup>④</sup>

朱牧師は四度の投獄、五年間の獄中生活の末、最後は平壤刑務所で殉教する。獄中での警察の拷問は激しいものだった。竹刀で全身を力一杯めった打ちにされる、天井に吊されて鼻から唐辛子入りの熱湯を注がれる、電気の拷問、生爪をはがされ細い竹串で突き刺される等々∴最も耐え難い拷問はアルコールランプの芯を性器の尿道に突っ込まれる拷問だったという。血が流れ、カミソリで皮膚をえぐられ続けるような酷い痛みで、これを受けると小便をするたびに耐え難い激痛に襲われた。あまりの痛さに部屋に帰ってもあちこち歩き回っては便器に掴まって泣き、死ぬほどの痛みは一ヶ月も続いた<sup>⑤</sup>。苦痛を忘れるため十字架の讚美歌を

歌い、賛美する時、拷問の痛みはやわらいた。あまりの苦しみに「主よ、この弱い朱基徹をあまり長くほおって置かないで、早くみもとに取り上げて下さい。」とよく祈ったという。しかし、これだけ極限の苦難の中でも朱基徹牧師は妥協しない。「天皇陛下もイエスを信じなければ地獄に行くのか？」との刑事の質問にはきっぱり答えた。「人間はすべて同じです。天皇といえども、神を信じず、罪を犯せば地獄へ行きます。」<sup>⑥</sup>

朱基徹牧師のいのちがけの闘争を支えたのは呉貞模夫人と山亭岷教会の長老執事たちである。二度目の拘束から釈放された夫を迎える夫人は開口一番こう尋ねた。「勝利でしたか？」そしてこう言った。「牧師さま、三日間ゆっくり休んでまた監獄に入る準備をして下さい。」主が夫を強めて最期まで闘う勇気を下さり、「死に至るまで忠実に」主の御意志を全うして殉教させて頂きよう夫人は祈った。他の牧師夫人はたいいてい面会に来ると「ヨボ、あなただけが神社参拝しないでいたらどうなるの？ 子どもたちはみな神社参拝する学校に行つて神社参拝しながら勉強しているというのに、その上あなたがこんなでいたら私たちはどうやって生きていくというの？」と夫に説得したため、ほとんどの牧師は気が挫けて降伏した<sup>⑦</sup>。しかし呉貞模夫人は正反対に夫にこう言ったのである。「牧師さま、少しも心配しないで下さい。お母さんや子どもたちのことは心配なさらず刑務所に入り、信仰を守つて殉教して下さい。この韓国教会の一粒の麦となり、韓国教会が多くの実を結ぶようにして下さい。牧師さまがしっかりと殉教してこそ韓国教会が立つのです。」子どもたちは学校を退学処分になり、総督府からは配給打ち切りに、しかもあちこち十三回も転居させられながら、呉貞模夫人は夫への約束通り必死に家庭を守り続けた<sup>⑧</sup>。

山亭岷教会の長老執事たちも決死で共闘する。彼らは担任牧師の教えを忠実に守り、教会員のほとんどは神社参拝を拒否。度重なる脅迫にも屈せぬため、平壤老会は一九三九年十二月十九日に朱牧師を罷免。さらに翌年三月二十四日の主日礼拝には平壤老会の三名の牧師が大勢の警官と一緒にやって来て教会に解散を命

じる。教会員たちは「神はわがやぐら」「進め主イエスの兵士らよ」など立て続けに賛美を大声で絶叫し続けてこれに抵抗するが、壇上で賛美を導く者らを警察が片っ端から逮捕して、遂に教会堂を強制閉鎖した。警官が会堂入り口を十字の木で打ちつけた時、チエー・コンミン蔡廷敏老牧師は慟哭した。「平壤老会よ！朱基徹牧師を破門した老会！このクソ牧師ども！山亭岷教会を閉鎖した牧師ども！」<sup>④</sup>しかし、閉鎖された後も教会の闘いはなおも続く。毎朝五時に集まっては朱牧師が「死に至るまでも忠実であるよう」祈る。しょっちゅう集まって礼拝しては警官に逮捕され、釈放されてはまた集まって礼拝する。そして、自分たちも苦しいのに、献金を集めは朱牧師の家族を懸命に支えたのである。会計の執事は朱牧師の家族に生活費を届けたかどで警察に鞭打たれ、それ以降は長老が高校生になる自分の娘を使って刑事に見つからぬよう鞆に米を詰め込み朱牧師宅に届けさせた。刑事に見つかれば名門校に通う娘は退学となり家族みなが投獄されるため、違う方法はないかと心配する夫人に「そんな辱めなど朱牧師が受けている辱めとは比べようもない！」と長老は一蹴した。また、教会員たちは背教した牧師たちを説得して歩いた。近所の教会の某牧師は、一度は神社参拝を拒否して投獄されたものの、面会に来た母親に「あんた、こんなにしてあんた一人死んだらそれが一体何の勝利だっていうの？あんたは若いんだから出所して働かなきゃ！留置場で死んだら何の得があるの？」と説得されて背教した。すると山亭岷教会の執事たちがその牧師を訪ねてこう説得するのである。「牧師さま、ペテロのことを考えてまた牢獄に入って下さい。」<sup>⑤</sup>

こうして彼らは忠実にキリストの御意志を全うした。牧師は死に教会堂も閉鎖されたが、山亭岷教会はキリストの御名の栄光を力強くあらわした。そして、朱基徹牧師は、日本も朝鮮半島も天照大神と天皇の権威一色という墮落しきった暗黒の世に、キリストのからだなる教会を力強く建て上げたのであった。

### Ⅲ 朱基徹牧師の抵抗権思想

それでは、朱基徹牧師は何のために闘ったのかを考察する。朱基徹牧師の抵抗に対する評価にはいくつかの見解があるが、主なものは、i) 無意味論、ii) 民族主義的理解、iii) 現象学的理解、iv) 信仰告白的理  
解の四種類である。

i) 無駄死に論：これは日本政府の解釈を鵜呑みにしたもので、この立場に立つ者は「神社参拝は宗教ではない。国民儀礼である」と主張する。この立場に立つ時、これに真つ向から反対して殉教した朱基徹牧師は全く意味のない抵抗をし、無駄死にしたことになる。この主張の代表的な人物は尹聖範、<sup>ユンソンギョク</sup>⑩、<sup>キムジニョク</sup>⑪、<sup>ユン</sup>金在俊とその弟子の鄭賀恩<sup>ジョンハカ</sup>で、彼らはボンヘツファーを二十世紀の真の殉教者と讚美しつつ「朱基徹牧師の死は：ボンヘツファーの様にその社会に対する教会の使命と責任に於いて獄死したと見なすことはできない。」として、朱基徹牧師ら抵抗者たちを「韓国教会の代表的な戒律主義者達、独善主義者、典型的なパリサイ人」と非難。彼らの受難と死は「彼らの無知のため」であり、「根本主義者達の最後の悪あがきの悲鳴」、「根本主義神学による思想の凍結」、「自分自身に対する虐待」ないしは「教理による自己疎外」の犠牲だとし、「朱基徹牧師は一つの不憫な保守主義信仰人の凄惨な末路に過ぎない」と言う。<sup>⑫</sup>

これに関しては、そもそも彼らの「当時問題とされた神社参拝、東方遥拝は国民として行わなければならない儀礼であった」という前提自体全く受け入れられない。当時日本の政府は「キリストは宇宙創造主にして日本帝国をも創造せるものである。天皇陛下も罪人にして悔い改めねば滅びる云々」と陳述する朱基徹牧師を「精神病者」と宣伝した。<sup>⑬</sup> 朱牧師が「社会に対する教会の使命と責任に於いて獄死したと見なすことはできない。」と言うが、私は朱牧師が社会に対する教会の責任を回避したとは全然思わない。これは後で述べる。

ii) 民族主義的理解：これは朱基徹牧師が民族のために抵抗したと考える立場で、代表的人物は李萬烈イ・マンニョル教授である。彼は「朱基徹が若い時に民族主義者、李昇薫イ・スンファンと曹晩植チョ・ウンシクの下で教育を受けたということ」等根拠としてこう結論する。朱基徹牧師はじめ抵抗者たちは「明らかに日帝に反抗したのである。ただ世俗的な武力による反抗ではなかったというだけの話である。彼は基督教が増加することが日本國対の変革をもたらすことであると見た。」<sup>14</sup> 李萬烈教授は神社参拝反対運動が持つ反日的性格を極めて単純に解釈し、朱基徹牧師が反日民族主義運動の一翼を担う目的で、すなわち武力抵抗は他の韓国人に任せて、朱牧師は文人として宗教分野で抗日運動を展開し、それが神社参拝反対だったと言っているのである。つまり、表面的には自らの宗教に殉ずるという形態をとったが、その本質は実には単なる民族主義運動に過ぎず、民族のために抵抗し、民族のために死んだことになる。これが正しければ朱基徹牧師の死は「殉教」ではなく「殉国」と呼ばねばならない。

しかし、これはどう考えてもあり得ない。なぜなら朱牧師自身が民族主義をはっきり否定しているからだ。例えば、民族主義の牙城であった山亭岬教会に赴任してまもなく語った「三種類の信仰」という説教ではこう言う。「三種類の信仰」とは①「民族運動、政治運動をするために教会に来てイエスを信じる」信仰と、②「人格を高め、道徳的生活をするためにイエスを信じる」信仰と、③「新しく生まれてキリストの贖罪を心に受け、感謝に溢れた信仰生活をするために教会に通う」信仰の三つである。そして、①と②の信仰に関して「そのような人はキリストと何ら関係がないので、今からでもこの場から立ち去るがよい！」と朱牧師は厳しく言い放った。<sup>15</sup> 彼は五山学校オースン・ハツキョで民族主義を教育されたが、目指すところは民族主義ではなかった。

一九三〇年代に行われた創氏改名を朱牧師が受け入れた事実も重要である。<sup>16</sup> 朱牧師が自分の民族を愛したことは事実だと思いが、しかし、だからといって民族主義や抗日運動として神社参拝に抵抗したとは到底思

われない。もしも仮に彼が民族主義で神社参拝に抵抗したのなら、民族の屈辱である創氏改名にのちがけで抵抗したはずである。ところが、新川基徹に改名することは受け入れた。同じく神社参拝に反対した韓尚東<sup>ハンサウ</sup>牧師もこれを受け入れたことは、彼らが民族主義や抗日運動として神社参拝に抵抗したのではなかったことを意味する。朱牧師はこうも言う。「私は国法を守っている。税金も払うし法律も守っている。しかし、神の十戒に逆らうことはできない。これが聖書の教訓だ。」<sup>17</sup>「朱牧師は大日本帝国の臣民ではないと言うのか？日本の国民でもあるのだ。」<sup>18</sup>朱牧師の四男朱光朝<sup>チユクワシヨウ</sup>長老から直接聞いた話しによれば、解放後、共産政權が朱牧師を「抗日運動の闘士」として賞賛し、大邸宅の権利書と莫大な金銭を持って来た時、呉貞模夫人は、朱牧師が抗日運動や民族主義で神社参拝に抵抗したのではないと言って断ったという。

単純に比較できないとは思いますが、そもそも「民族のための愛国的闘争」というなら、積極的に戦争協力した当時の日本の教会も負けないくらい民族主義は強かった。しかし、どんなに民族のため貢献しても神の前には何一つ価値を持たない。それ故、民族主義的理解はほとんど「犬死に」的理解に通じるものがある。

iii) 現象学的理解：このような民族主義的理解では朱基徹牧師の「殉教」の意味が歪曲されると考え、朱基徹牧師の抵抗と死が純粹な宗教的な動機と目的によるものだったと閔庚培<sup>ミンケヒベ</sup>教授は解釈する。「彼は信仰に従っただけであったが、信仰は信仰自らを物語り、抵抗し、作用するということである。信仰は自ずから外に溢れ、悪の勢力に抵抗し、そしてさばきをもって現象化する事実を朱基徹牧師は我が韓国教会に信仰の遺産として教え、残してくれたのである。」つまり朱基徹牧師は国家や民族のことを念頭に置かず自分の「信仰」をただひたすら純粹に追求しただけだが、何か自分の個人的「信仰」が「自ずから外に溢れ」、遂には自然と「悪の勢力に抵抗」するようになったのだという。閔教授はこれを「抵抗の現象学」と呼ぶ。<sup>19</sup>

これは民族主義的理解を脱した点では評価できる。しかし、極めて実存的理解に終始して問題である。朱

牧師は国家や民族等を念頭に置かずに自分の個人的「信仰」をひたすら純粋に追求しただけだったが、それがたまたま「悪の勢力に抵抗」するよう「現象化」したと言うのだ。これが「朱基徹牧師が我が韓国教会に信仰の遺産として教え、残してくれた」ものと言われると、果たしてそうかと首をかしげたくなる。

iv) 信仰告白的理解：李象奎教授は、<sup>イ・サンギョ</sup>朱基徹牧師が神社参拝に抵抗した理由として a、神社参拝は神の戒めに反する偶像礼拝だと見なしたから、b、教会の純粋性と聖さを守るため、c、神社参拝は個人の信仰の良心と信仰の自由を抑圧するものと見たから、の三点を挙げる。私も基本的にはこの立場に賛成だが、これを①「神のことはを守るため」、②「教会を改革するため」、③「国家を改革するため」と言い替えて説明したい。もちろん朱基徹牧師は、閔教授の言うように、究極的にはただ「神の栄光のために」神社参拝に反対した。しかし同時に①「神のことは」②「教会」③「国家」のためにも神社参拝に抵抗したのである。こうした理解は彼の「信仰的動機」を決して弱めず、むしろ正しく評価することになると思う。

①「神のことはを守るため」：朱基徹牧師は、死に至るまで忠実に神の戒めを守り通して神に忠実であろうとした。それは「神社参拝は神の戒めのうち第一戒と第二戒を同時に犯すものである故、これを徹底的に排撃せねばならない。」との宣言の内に表れている。偶像崇拜の問題はキリスト信仰の「死活問題」である。天照大神を拝むようなキリスト教はもはやキリスト教とは言えないからだ。これを妥協すれば、自分が牧師であるどころか、キリスト者であることさえも失ってしまう。だから朱基徹牧師は抵抗したので。「我らの主が私のために十字架の苦難をお引き受けになり、血を流して死んで下さったのに、どうして私が恐ろしいからといって主を知らないふりできるでしょうか。私にはただ一死覚悟があるだけです。」朱基徹牧師は、純粋に神のことはを守るために神社参拝に抵抗して殉教したのである。

②「教会を改革するため」：朱基徹牧師は韓国教会を改革するために神社参拝に抵抗した。朱牧師は神のこ

とはこそが教会を建て上げる唯一のものだと見ていた。すでに紹介したが、「預言者の権威」という説教が彼の教会観をよく表している。この説教のキーワードである「一死覚悟」とは、当時の日本がさかんに呼びかけていたように、民族主義や精神主義を鼓舞しているのではない。その意味は「一死覚悟をして神のことは妥協なく語る」という一点にある。そしてこれこそが「預言者の権威」だというのだ。ここに朱牧師の教会観がある。「牧師さま。少しも心配しないで下さい。お母さんや子どもたちのことは心配なさらず刑務所に入り、信仰を守って殉教して下さい。この韓国教会の一粒の麦となり、韓国教会が多くの実を結ぶことができるようにして下さい。牧師さまがしっかりと殉教してこそ、韓国教会が立つのです。」という呉貞模夫人の言葉通り、牧師が神のことは正しく語り、それを守ってこそ「韓国教会が立つ」。だから、牧師が神のことは正しく語らぬなら、たとえ教会の建物は残り、牧師も信徒も生き延びたとしても、教会は立たないのである。神のことは正しく語らぬ、教会としての本質を骨抜きにされた教会はもはや死んだ教会である。どんなに大会堂を建てても、信者がたくさん集っても、朱牧師が見る時それは倒れた教会であり、どんなに待っても実を結ばぬ不毛な教会なのだ。ここに朱基徹牧師の明快な教会観がある。朱牧師にとつての教会成長とは、たとえ教会が解散になり、牧師が投獄されて殉教しても、神のことは忠実に語り、キリストの御意志を忠実に全うして、この罪の世にキリストの栄光をあらわして行くことに他ならない。だから、教会が迫害を回避して「神社参拝は宗教儀式ではない、単に国家儀式だ」と偽って神社参拝するようなことは、朱牧師にとつては全く考えられないことだった。何故ならそんなことをしたら教会が教会でなくなるし、牧師は牧師でなくなる。それなら殺されて死んだ方がましだった。朱牧師にとつては「イエスを棄てて生きるとは本当の意味では死ぬことであり、イエスに従って死ぬとは真の意味で生きること」だ。信仰告白を捨てて生き延びても地獄へ堕ちれば何の意味もない。それより信仰告白を貫いて殉教してもそれで天国へ行けるな

ら本望である。それで朱牧師は神社参拝に抵抗して殉教した。これは信仰が強い弱いという問題ではない。その人が果たして本当に永遠のいのちを神さまからもらったか否かというキリスト信仰の本質を問う問題なのではないか。何故なら、私たちのキリスト信仰とは、朱牧師も言うように、道徳や哲学、民族運動や御利益宗教、処世術の一種などではなく、永遠のいのちの問題だからだ。それで「天皇陛下もイエスを信じなければ地獄に行くというのか？」という刑事の尋問にも、朱牧師は「人間はすべてみな同じです。天皇といえども神を信じず過ちを犯せば地獄へ行きます！」とはつきり答えることができた。これこそまさしく朱基徹牧師の信仰の核心であったのだ。そして、自ら神社参拝に抵抗することが、朱牧師にとつてはそのまま教会を改革することそのものであった。

李象奎教授は、朱牧師が神社参拝には反対したが反対「運動」には同調しなかったことを指摘している。韓尚東牧師が「組織化された強要に対しては、組織的な反対で対応せねばならない」と考え、組織的に「神社参拝反対運動」を展開しようとしたのに対し、朱牧師は「組織の弱点を憂慮したために、個人の信念を強調」し、組織的に展開することを嫌ったというのである。私はこの点さらに、朱基徹牧師が神社参拝への抵抗は純粹にただ「信仰によつて」なされねばならないと考えていたと理解したい。つまり、朱牧師が「信仰闘争は、組織の力ではなく、ただ信仰の力によつてなされねばならないと見ていた」と考える。神社参拝反対運動はあくまで神への「信仰によつて」なされるべきであつて、単なる社会運動や民族運動とは区別されねばならない。これは極めて重要な点だ。神社参拝に対する反対は、個人的にせよ集团的にせよただ信仰によつてなされねばならない。日本への恨みや憎しみや敵対心で展開してはならない。あくまで信仰によつてなされるべきだ。「信仰によらないことはみな罪」だからである。それ故、韓尚東牧師が現老会解体と新老会結成運動を提案した時、朱基徹牧師はこれを「時期尚早」と反対した。それは朱牧師が自分たちの闘いを

「信仰の闘争」と考えていたからである。この点、社会運動や民族運動とは違う。「向こうが力で来るならこっちも力で！」と大げさに群衆を煽動していたずらに民族感情を煽ってはならない。聖なる「主の闘い」はただ純粹に神への敬虔によって闘われるべきだと朱牧師は考えたのではないか。朱牧師が韓牧師の提案に反対したもう一つの理由として考えられるのは、朱牧師が現老会を改革しようと考えていたからである。この点、分離主義的な立場を見せる韓牧師とは対照的だ。李象奎教授の指摘通り、「朱基徹は神社参拝を反対することで教会の純潔と純粹性を守ろうと努力したが、だからといって分離主義的立場をとらなかつた。彼は地上の教会の不完全性を認めていたのであり、神社参拝反対者たちだけによる別途の教会組織をつくろうとは考えなかつた。」<sup>23</sup>それで死ぬ二日前に「私は天の御国に行ったらこの受難の同胞たちのために祈ります。」と妻に言う。たとえ神社参拝を決議し、自分を罷免した老会であっても、韓牧師のように即座に「現老会を解体する」とか「新老会」を結成するとか即断せずに、むしろそれが立ち直るよう祈るのである。このように、朱基徹牧師は韓国教会を改革するため神社参拝に抵抗した。

③「国家を改革するため」・朱基徹牧師は国家を神のことばで改革するため神社参拝に抵抗した。三回目の拘束の際「今日から説教するな！」と警察に命令された時、朱牧師はこう答えた。「私は説教権を神さまから受けたので、神さまがやめるとおっしゃればやめるであろう。しかし、私の説教権は警察から受けたものではないので、警察署がやめると言えるはずがない。」「説教をやめなきゃ逮捕する。」という脅迫に「説教することは私のつとめで、逮捕することは警察のつとめだ。私は私の務めを果たす。」と答える。「大日本帝国警察官の命令に従わんというのか！」しかし朱牧師はこう言い返すのである。「その日本の憲法が礼拝の自由を許可したのだ。あなたがたは今礼拝妨害、憲法違反をしているではないか。」<sup>24</sup>「私は説教権を神さまから受けた」と、神のことばを説教する権限が絶対不可侵なもので国家権力も干渉できないと朱牧師は宣言する。

教会は世俗の国家と並ぶ霊的な独立王国なのだ。教会は世俗のことでは世俗の権力に従うが、信仰のことは世俗の命令に従えない。この意味で教会は世俗の権力から完全に独立している。そして、「説教することは私のつとめで、逮捕することは警察のつとめだ。私は私のつとめを果たす。」と言う。つまり、教会は、国家からの独立と自由を保ちつつ、「神から与えられた自分の責任を果たす」のだ。「神から与えられた自分の責任」とは何か？それがすなわち神のことばを語る「説教」なのである。教会は、国家からの独立と自由を保ちつつ、国家に向かって神のことばを語り続ける。これが国家に対する教会の本質的責任だと言う。そうして教会も国家も互いに独立を保ちつつ、共に神の栄光のために有機的に関係し、機能していく。これはカルヴァンの考えた「教会と国家」のあり方であった。<sup>26</sup>「教会と国家」の領域を混同せず、さりとして隠遁的分離主義にも陥らず、教会は国家からの独立を保ちつつ、同時に委ねられた霊的な剣、即ち神のことばをもって、積極的に俗権に助言し、警告を発し、俗権に神のことばを教育するのである。「大日本帝国警察官の命令に従わんというのか！」との警察官の怒号に対し「その日本の憲法が礼拝の自由を許可したのだ。あなたがたは今礼拝妨害、憲法違反をしているではないか。」と言う時、朱牧師は教会に対する俗権の責任と義務を教育していたのである。神に立てられた「預言者」として、「預言者」の権威をもって「一死覚悟」して妥協せず神のことばを語る、そこに国家に対する教会の責任があると朱牧師は考えた。ここに朱牧師の言う預言者の権威がある。朱基徹牧師は、「国家を改革するため」神社参拝に抵抗したのである。

以上見てきた通り、朱基徹牧師は究極的にはただ「神の栄光のために」神社参拝に反対した。しかし、それは同時に「神のことばを守るため」、「教会を改革するため」、「国家を改革するため」の闘いでもあった。朱基徹牧師は、これらを明確に見据えながら、神に敵対する悪魔と格闘したのである。

おわりに　　〜朱基徹牧師の抵抗から学ぶこと〜

一九四五年八月十五日、日本は敗戦した。神に敵対して偶像崇拜を強要し、現人神天皇の権威を世界に現そうとした大日本帝国は神のさばきを受けて滅びる。神聖不可侵と教え込まれた天皇の権威は地に落ち、国家や天皇をも審判なさるキリストの権威が現れた。そして、神の審判を警告した朱基徹牧師の預言は地に落ちずに成就した。朱基徹牧師は死に、教会堂も失ったが、彼の語った神のことばはしっかりと倒れず立ち続けたのである。自らが神社参拝しないことで朱牧師はまことの神に栄光を帰し、国家も服従すべきキリストの権威を世に証して主の御名の栄光を力強く現した。朱牧師の見たとおり、やはり神のことばこそが教会のいのちであった。教会が立つのも倒れるのもただ神のことばによったのであり、神のことばこそが教会の死活問題の鍵を握っていたのである。

反対に、神のことばの権威を世に立てず、世に妥協した教会はその後どうなっていたか？一言で言うと、神と人の前に罪を犯したのである。すなわち、「国家神道」の論理を受け入れ、あとはひたすら国策に追従していった。一度妥協した教会はその後もズルズルと妥協し続け、自分たちの生き残りのためなら何でもやった。「信者を六年、伝道者を満十年やって来て治安維持法という法律違反事件によって批判と反省の最後の結論を生み出すことができた。」「天皇帰一の精神、それが私たちの行く道であり、信仰である。もし、キリスト教信仰を捨てた故に地獄へ行けといはれるならば、私は日本人のひとりとして行こうと決心した。」と警察に手記を提出した牧師の告白は、惨めな教会の成れの果てである。そして、教会は「殉国即殉教」と勝手に定義し、「今は殉教の精神を要する時だ！」と侵略戦争のために死ぬよう全教会に呼びかけた<sup>27</sup>。そして、国家盲従の姿勢は神のさばきで国が減びた後も変わることなく、敗戦後も天皇の戦争責任を糾弾すべきであったのに、むしろ天皇免責に貢献したのである。結局、日本の教会は、遂に国家を改革する能力を発揮しなかつ

た。私は思うのだが、日本の教会は国家にとって未だに人畜無害な存在ではあるまいか？否、神のことばを委ねられた預言者としての責任の重大さをまじめに考えるならば、「人畜無害」どころか神の呪いをもたらす有害な元凶とさえ言えるのではないだろうか。戦時中教会が国家に対して果たすべきだった責任は、朱基徹牧師のように一死覚悟で神社参拝しないで神に栄光を帰することであり、「偶像崇拜を強要し、自国の利益のためにアジア諸国を侵略するような国家は必ず神のさばきを受けて滅びる！」と神のことばをはっきり語った朴寛俊長老のように国家に警告を発することであった<sup>23</sup>。もし教会がそうしたならば、その時は世からひどく迫害されただろうが、日本もあるいは滅びずにすんだかも知れないし、少なくとも戦後は世の人が真理を語る教会を信頼し、尊敬して、教会の語ることばにもっと耳を傾けたかも知れない。しかし、教会が神のことばを正しく語らずキリストの栄光を現さなかったために、国家は滅び、教会も（あってもなくてもいいような）つまらぬ存在となり果てて社会に見捨てられてしまったのではないか。塩けのない教会は「もう何の役にも立たず、外に捨てられて、人々に踏みつけられるだけ」（マタイ五・13）とは本当だ。そうして世の光の塩となるメッセージも語れぬまま「三代、四代にまで」（出エジプト記二〇・5）、「四十年の間」（民数記一四・34）、否、五十六年間も荒野をさまよいながら、あの時の神さま「への反抗が何かを思い知」らされて来たのではないだろうか。このまま目覚めず反省しなければ、きっと今後も「七十年」（ダニエル九・2）の惨めな捕囚生活を続けねばならぬであろう。

朱基徹牧師が命がけて現した神の栄光に強烈に照らされて「思い知らされる」歴史の教訓は、やはり神のことばこそ教会のいのちだということである。神のことばを正しく語ってこそ教会は生きるし、国家権力や罪人を恐れて神のことばを曲げて語れば教会は死ぬ。たとえ国家の迫害を逃れて生き残り、人気を博して大教会になったとしても、妥協した内容を語るなら教会としての本質を失う。キリストのからだとしてのいの

ちを失うのだ。反対に、たとえ教会堂が閉鎖され牧師が殉教しても、キリストの御意志を忠実に全うしたなら教会は立派にキリストの栄光を現したと言える。キリストの召命にしっかりと応えたとと言える。「よくやった。良い忠実なしもべだ。」(マタイ二五・21)と、終わりの日にはイエスさまにほめられるであろう。ここに私たち日本の教会が朱基徹牧師の抵抗から学ぶ本質的な内容があると思う。

ところで、これほど重要な朱基徹牧師の闘争を、当時の日本の教会ははたしてどう見ていたのであろうか。中には正しく評価する者もいた。<sup>30</sup>しかし、多くはこうした「抵抗」を良く思っていなかった。それどころかいい迷惑と思っていたのである。一九三八年六月「朝鮮長老派系の学校大小併せて百十五校を廃校する」声明をアメリカのミッシヨンが発表したのを、メソジストの山口徳夫は「在邦宣教師諸氏の日本国民道徳に対する認識不足と、聖書解釈の偏狭ないしは誤解に基づくもの」と評する。「神社崇敬はここに改めて云ふまでもなく日本国民の美德である。先祖崇敬の最も典型的なものである」と「神社は宗教に非ず」の前提に立ち、神社参拝拒否を第五戒に反する罪と断罪して「懺悔しなければならぬ」とまで言うのだ。<sup>31</sup>何故こんな態度をとったのか？それは韓国教会が強硬に神社参拝に抵抗することで政府が態度を硬直させ、日本の教会をも同一視して激しく弾圧することを恐れたからだ。<sup>32</sup>つまり抵抗者たちがどんなに立派に殉教しても、当時の日本の教会はそれを正しく評価するどころか、何の価値もない「犬死に」としか評価しなかった。否さらに言えば、日本の教会にとって抵抗者は「氣違ひじみた熱狂的信仰」<sup>33</sup>を持つ「精神病者」に等しかった。彼らの思想は「危険思想」で、彼らの抵抗は「懺悔しなければならぬ」罪なのだ。それ故、朱基徹牧師の殉教の死などは早く取り除いてしまわねばならぬ有害な死であった。それで、一九三八年六月二十九日から三日間、富田満牧師が日本の教会を代表して神社参拝するよう朝鮮の牧師たちを説得しに渡韓した。韓国では二千人以上が投獄され五十人余りが殉教したが、富田はこうした有害な死を除去するために来たのである。それに

しても、こうした一連の行動が自分たちの信仰と抵抗者たちの信仰は違うのだということをやむを得ず国家にアピールするためのものとはいえ、自分たちの信仰が殉教者の信仰と異なるといふのなら、一体彼らはどういう神を信じていたことになるのであろうか？彼らは「死に至るまで忠実であれ」と主に励まされるスミルナ教会を罵っていた「サタンの会衆」（黙示録二・9）と同様に、殉教者を罵っていたのである。

私は、ここが日本の教会の戦後の新しい出発点だったと思う。そして、今、殉教者の視点から、戦中戦後の日本の教会の歩みをもう一度根本から見直さねばならないと思っている。私たちが国家と一緒に「精神病者」と見下し、罵り、見捨てて殺した朱基徹牧師の闘争を正しく評価せねばならない。そして、これからは、殉教者の精神にならって生きて行きたいと思う。

最近私は特に考えさせられているのだが、日本の教会は天皇制の呪縛を今日だけ克服できているのだろうか。朱基徹牧師が生きていたら今の現状をどう見るだろう。預言者の権威は今日果たして世に立っているのだろうか。今日どれだけの牧師が天皇制の抱える問題をはっきり講壇から説教できるのか。最近では「日の丸・君が代」問題の深刻さを牧師はきちんと信徒に教えたのか。役員や信徒の反対を恐れて真理を説教できないのではないか。白黒はつきりしない説教しかできないのではないか。戦時中に一度敗北した日本の教会は、今日に至るまで、世と摩擦を起こさぬよう迫害を受けぬようにと、何とか辛うじて惨めに細々と生き延びて来ただけの「負け犬根性」抜けきらぬままではないのか。これは殉教者を罵って見殺しにした罪を悔い改めていないことに対する神さまの罰に違いない。こうした体質を根本から変えないことには、日本の教会はこの先百年経っても世にキリストの栄光を現せるはずがない。特に最近のテロ事件以来、世の中は急激に右傾化している。こんな時代に、まともに聖書から真理を語るなら、当然世から厳しい迫害を受けるであろう。村八分や殺されることも覚悟せねばなるまい。しかし、だからといって世と妥協するのでは戦時中

の教会の二の舞である。時代が悪いならなおさらのこと、教会は世の常識や評判に振り回されることなく、神のことはである聖書から物事を正しく判断せねばなるまい。そして、あらゆる困難を耐え忍び、一死覚悟して神のことはを妥協なく忠実に語らねばならない。「夢を見る預言者は夢を述べるがよい。しかし、わたしのことを聞く者は、わたしのことを忠実に語らなければならない。麦はわらと何のかかわりがあるうか。主の御告げ。」(エレミヤ二二・28)

主の苦難を避けて神に呪われる生き方はもうたくさんだ。殉教者の精神にならない、主の苦難を喜んで耐え忍び、主の御意志を忠実に全うして主に喜ばれたい。そして、子々孫々千代に至る祝福の土台を築き上げていきたいと切に祈る。

## 注

- ①姜在彦「日本による朝鮮支配の四十年」(朝日文庫 一九九五)、韓国基督教歴史研究所『韓国キリスト教の受難と抵抗』(信教出版社 一九九五)、飯沼二郎『天皇制とキリスト者』(日本基督教団出版局 一九九一)、村上重良『国家神道』(岩波新書)、李象奎『韓国教会の歴史的流れ』(大韓耶穌教長老会總會教育委員会 一九九二)、姜洵作『日本統治下韓国の官教と政治』(大韓基督教書会)等を参考。
- ②金麟瑞『一死覚悟』(ソウル キムン社 一九六九) 一〇頁
- ③閔庚培『神の栄光のみく殉教者朱基徹牧師伝』(すぐ書房 一九八九) 一〇六〜一七三頁
- ④金ヨナ『一死覚悟』(韓国教会プリチャッキ宣教会 一九九二) 二七二頁
- ⑤金ヨナ 前掲書 三二四〜三三六頁
- ⑥金ヨナ 前掲書 三二四〜三三五頁

- ⑦金ヨナ 前掲書 四七〇頁
- ⑧金麟瑞 前掲書 三四〓三五頁
- ⑨富坂キリスト教センター編『日韓キリスト教関係資料集Ⅱ』（新教出版社 一九九五）六〇八〓六一三頁、金麟瑞 前掲書 三三三頁
- ⑩金ヨナ 前掲書 四七一頁、四八一〓四八二頁、関庚培『ただ神の栄光のみ』二二八六頁
- ⑪根拠としてa明治十四年十月に発表された「神社は宗教ではない」と規定した法令、b一九三五年平安南道内務部長の「神社参拝拒否に対する釈明書」での「神社参拝は宗教行為ではない」という釈明、c「神社参拝は宗教ではないと言っても構わない」との海老名弾正の発言、dローマ教皇庁からの一九三六年五月二五日「Sacred Congregation of Propaganda Fide」を通じた「神社参拝は宗教儀式ではない」との発表を挙げる。李象奎「朱基徹牧師の神社参拝反对と抵抗」『基督教思想研究第四号』（高神大学校基督教思想研究所 一九九七）一九九頁
- ⑫金容福等『韓国基督教と第三世界』（プルビ 一九八一）一〇一頁、一〇七頁
- ⑬富坂キリスト教センター 前掲書 三五〇頁
- ⑭李萬烈「改新教の伝来と日帝下教会と国家」『国家権力と基督教』（民衆社）一八八頁
- ⑮関庚培 前掲書 二〇一頁
- ⑯金ヨナ 前掲書 三八八〓三八九頁
- ⑰同上 三二四頁
- ⑱李象奎 前掲書 二二二頁
- ⑲関庚培 前掲書 一五頁

- ⑳ 李象奎 前掲書 二二三～二二四頁
- ㉑ 一九三五年平壤神学校の礼拝での朱牧師の説教より。金麟瑞 前掲書 五三～五八頁
- ㉒ 李象奎 二二七～二二八頁
- ㉓ 李象奎教授はこれを四世紀のドナトゥス論争と迫害に屈して信仰告白を捨てた者を「死に値する罪人」と断罪したドナトゥス派は、重罪監督によって司式された任職式が無効なことから、自らを（「死に値する罪」の無い聖職者と唯一の有効な秘跡を持つ）唯一の真の教会と主張したととえる。韓尚東牧師の他に完全主義的な分離主義の人物としては平北の李基宣<sup>イギギン</sup>牧師、平南の蔡廷敏牧師がいたが、そうした中で朱基徹牧師が彼らに反対したのは、朱牧師が教会のきよさと純潔を完全主義的には理解しなかつたからだという。
- 李象奎 前掲書 二二九～二三〇頁
- ㉔ 金麟瑞 前掲書 三〇頁
- ㉕ D・ナウタ『カルヴァンと政治（抄訳）』（日本基督教会靖国神社問題特別委員会）六四、六八、七〇、七九頁
- ㉖ 辻宣道『嵐の中の牧師たち』（新教出版社）一九九三）一〇六頁
- ㉗ 一九四四年九月十日「日本基督教団教団新報」より 戸村政博編『神社問題とキリスト教（日本近代キリスト教史資料Ⅰ）』（新教出版社）三五五頁
- ㉘ 金田隆一『昭和日本基督教会史』（新教出版社）四三五～四四七頁
- ㉙ 朴寛俊<sup>アン・イヌク</sup>長老は安利淑<sup>アン・イヌク</sup>を伴って来日し、「日本は現在天地の創造主であられる神にあらゆる反逆をしています。ですから神は日本を罰せずにはいられません。硫黄の火で日本は焼かれて亡びます。」と政府の要人たちに警告し、それでも埒があかないので、最後は「宗教団体法案」審議中の帝国議会の傍聴人席から「エ

ホバ神の大使命！」と叫んで決死の覚悟で警告文を投げて投獄され、六年の獄中生活の後、平壤刑務所で殉教した。安利淑『たとえそうでなくとも』（待晨社 一九七二）ちなみに、朴寛俊長老は、来日の際、（現在の日本同盟基督教団）大井教会の夕拝でも証しをしている。

③〇例えば、新島基栄牧師は、朱基徹牧師が「精神病者」などではないと言い、「天皇陛下を愛するがために悔い改めさせて救う」べく「銃殺を覚悟の上で」信仰告白している、時局に迎合せぬ真の牧師と正しく評価する。富坂キリスト教センター 前掲書 三五〇頁

③①富坂キリスト教センター 前掲書 一八六―一八八頁

③②戸村政博編『靖国闘争』（新教出版社）一二三頁

③③一九四二年ホーリネス系三教会から検挙された九十六名に関して日本基督教団主事の菅谷仁がこう表現した。同志社大人文科学研究所『戦時下のキリスト教運動』（新教出版社 一九七二）一四四頁

（一九八八年卒）